

## 事件（私小説風その四）

どこをどう走って来たのか、まるで記憶にないままホテルに着いた時には夜が白らみ始めて、お客様の姿は表にも館内ロビーにも無く、代わりに警察官が十数人、ひと仕事を終えたような収束をしていた。

どうやら、お客様はそれぞれの部屋にすでに落ち着いているようで、何事もなく経過している様子に胸を撫で下ろすばかりだった。

当直課長にお客様への対応や反応を聞く。お客様は全員館外へ避難していたのだが、さすがに皆さん驚きのご様子であったという。（どのようなご案内誘導にしたのか？収束するのに、どの程度の時間を要したのか？記憶にも手元の記録に無い）

お骨折り頂いた県警には丁重に礼をのべ、今後の対処を伺った。それによると、時限爆弾を設置しそうな一階から最上階の七階までの全パブリックスペース、地下の洞窟施設、別棟を含む全館すべてはかなり広い範囲を警察官でチェックしたそうだが、不審物は見当たらず、先ず問題は無いと判断してくれたようである。

そして今後注意すべきは、何か隠せる場所を設けないことが肝要で、具体策を挙げて助言してくれた。

また考えられる犯人像や動機といったことを尋ねるも、理由や動機を推測できるような言葉や様子を何ら残していないため、手掛かりは全くないという。逆に当方に思い当たる節がないか？それを尋ねられた。残念ながら、この時点では見当の付けようがなかった。総力で対処してくれた県警にはつくづく有り難いと感謝している。

不可解な出来事であったが、無事に済んで胸を撫で下ろした一件となった。

夜が明けて、すべてのお客様にご迷惑を陳謝して落着きとなったが、私どもの落ち度でないにしろ、申し訳ない限りの旅をもたらしめたことになったことになる。

落着いたとはいえ、私やホテルスタッフにとって腑に落ちないままの日が過ぎた。

ただ県警の助言、何か隠せるような物を置かない、設けない、隙が生じないよう対策はしっかりと取組むようにした。先ず常に目の届くホテルスタッフの身近なフロント脇・レストラン受付脇以外のお客様の立ち入りそうな箇所からすべてのゴミ箱を撤去した。また館内の植栽周りや物陰になりそうなところにも日頃のチェックができるよう、総支配人としての朝・昼・夜に行なっている全館見回りの際にも留意し、監視カメラのチェックばかりに頼らないメンテナンスチームの日夜の定期点検にも、不審物のチェック項目を加えるようにした。

考えてみると、「安全で安心できるリゾートにする」というのが、基本的に利用者限定の「クラブ」形式にした根底の発想にある。したがって入館前のゲートチェックも、すべての出入り口に設けた門扉・施錠も監視カメラも装備していたが、そこに、ゴミ箱撤去など館内にも油断しない状態が整ってきたことになる。そして今後も手を緩めずに念頭に置いてゆくのが私たちの務めとなろう。

なお、間もなく鉄道を含めた国内のあらゆるパブリック空間に、ゴミ箱撤去などの運動が広がってゆくことになった。それほど、安心・安全が希求される時代になったといえる。

とある日、本社から或る情報が私のもとに入ってきた。

ひよっとして、騒ぎを起こした犯人はホテル近所の同業者でないか？という。

当施設を着工するようになってからのこと、ほぼ一年前になる。関西を拠点にする或る暴力団から脅迫まがいの電話が本社に入ったらしい。どついつつと今ひとつ筋書きが判らないが、どつやら、当ホテルの出現により近所の某旅館が危機感を感じて暴力団に頼み込んだ、と考えられることがあった。

今回の事件は、その筋でないかということだ。そうかも知れないし、そうでないかも知れないが、唯一の情報且つ推測となった。

そして三ヶ月ほど経って、私は浜続きの半島に建つその旅館に向っていた。

旅館は私どものホテルから一望できる数百メートル東方の半島にあって、木造、洪い瓦屋根で三階ほどの数寄屋風。結構な老舗で通っている。こちらから見えるということは、あちらからも眼に入るとのことだ。

私は浜伝いにその旅館を見ながら歩いて来た。

受付・帳場にホテル名と自分の立場を示す名刺を渡して、ご挨拶に参上した旨、責任者への取次ぎをお願いした。

しばらくして、年恰好は私より五、六歳は先輩になるか、恰幅の良い紳士が背広姿で現れた。

客室であろう、落ち着いた八畳ほどの和室に案内されて、あらためてご近所の新入りとして挨拶に伺った旨述べると、旅館の社長と明かされ丁寧に返礼された。

茶菓子が運ばれて、何から話そうか、心中身構えながらやや躊躇している、相手から饒舌に話し出すではないか。それも、あつげらんかんとこんな内容だ。

当旅館は食中毒を二回も出したんですよ。調理場で全部造りあげてから部屋出する従来の旅館スタイルに問題があったんです。早めに手掛けた料理は時間が経ってしまい菌が繁殖し易いですよね。

大変な思いをしました。今は一品一品お出しようにしています。おたくと同じスタイルです。

なんと、当方を知っているのか。しかし、自分のところの恥もさらけ出す、その屈託の無さに正直驚いた。当方ではほぼ容疑者扱いで構えて注視していたのに、内心すっかり拍子抜けの体であった。

我がホテルを慌てさせ、穏やかならざる心中をぶちまけて鬱憤が晴れた気分になっていたのか、そう視るは下衆の勘ぐりだろうか？ 確かめようがない。

当初の目論見では、過日の一件を持ち出して反応を見ようと思つて来たわけだが、どうやらそれも大人気ないことのように思えてきた。この御仁は何の反応も示さず、やり過ごすだろう。そこに居たのは結構な大人であった。爆弾騒ぎは持ち出さないことにした。

なお念のため、集客は張り合わないことになるだろうと推測できるように、我がホテルがメンバーと呼ばれる固定客やその招待客に限定されることを説明しておいた。それを伝えるだけでも佳しとしよう。

結局、雑談をひとしきりして座を辞することにした。唐突の訪問を謝辞して、ふと窓を見やると、我々のホテルが西方の半島上に形良く見えている。

これか！この景色の中にモダンな高層ホテル。それが忽然と姿を現せば、あそこに凄いホテルがある！お客様を盗られる！そう懸念すれば、彼等ならずとも邪魔になるだろう。

それが、今回の事を起こした一件と断定できないものの、何となく納得する訪問となった。

旅館を後にしながら、私の中で、今度こそ一件落着と片付けた。

(続く)